

教職大学院における長期学校実習に対する支援体制の試み

－ manaba folio の活用－

早稲田大学大学院教職研究科：武 沢 護，朝日ネット：小松 大，島崎綾太

Key Words：クラウド型ポートフォリオ，e ポートフォリオ，教員養成，教職大学院

1. はじめに

教職大学院が教員養成に特化した専門職大学院として2008年4月に開設され、今年で5年目に入った。カリキュラムの特徴として、理論と実践の融合を図る教育を目指し、特に「学校における実習」が10単位以上を必修としているところが特徴である。

この長期にわたる学校実習は、従来の講義科目と異なり、特に「指導と評価」についてはさまざまな問題点と課題がある。そこで、昨年度末から manaba folio (ASAHI ネット) というクラウド型ポートフォリオシステムを導入し、この指導・支援体制の改善を試み、現在は事前指導や教材作成における協働学習を推進している。ここではその経過報告とクラウド型ポートフォリオシステムの可能性と課題を探る。

2. 教員養成の改革の方向性

2-1 教員養成の修士レベル化

中央教育審議会「教員の資質能力向上特別部会」の審議のまとめによると、これからの教員養成の軸は修士レベルに位置付けられている¹⁾。学部において教養教育、専門分野の基礎・基本を修得した上で、大学院レベルにおいて、教科の専門的知識、学校現場体験の実習、ICTの活用などの学びを深めるという考え方である。すなわち、学部4年間で教員としての基礎的な素養を積んだ学生が大学院において学校現場での実習を体験し、理論と実践の往還を2年間で経験する狙いである。

2-2 教職大学院での取り組み

現在の教職大学院のカリキュラムは、必ずしも今回の中教審の特別部会の提言に沿って実施されていないが、今後の「修士レベル」の具体的モデルを提供していることには間違いない。特に、学校現場での実習（本学では学校臨床実習とよぶ）は、このカリキュラムの中では中核といえる。早稲田大学の大学院教職研究科2年制コース（教職未経験コース）では、2年間

で実習Ⅰ（25日）、実習Ⅱ（10日）、実習Ⅲ（15日）と計50日にわたる連携校での実習を義務付けている。

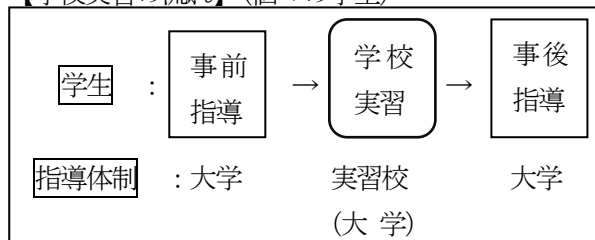
2-3 実習の重要性と問題点

実際には、東京都教育委員会や神奈川県教育委員会との連携を得て実施しているが、この実習にあたり学生の活動をどのように指導・評価するかは非常に難しい。事前・事後指導は大学側、実習期間中の評価は連携校の担当教員と大学担当教員双方で行うことになり、最終的には大学側が総括的に評価を行う。具体的に、教員は1人あたり5～10名の学生を担当し、事前指導、連携校訪問指導および事後指導を行う。学生はこの間、実習前の情報収集、教材の準備、実習中における授業案作成、教材作成ならび学生同士の情報交換、教員との相談などが必要になる。特に重要な視点は、

- ・学生自身の内省と仲間とのコミュニケーション
- ・実習時に活用する教材などの蓄積、改善、共有をいかに円滑に行うかである。

しかし、実習期間になると学生は互いに長期間大学を離れるため、担当教員の指導やゼミ生からのきめ細やかな支援を十分に受けることができない。

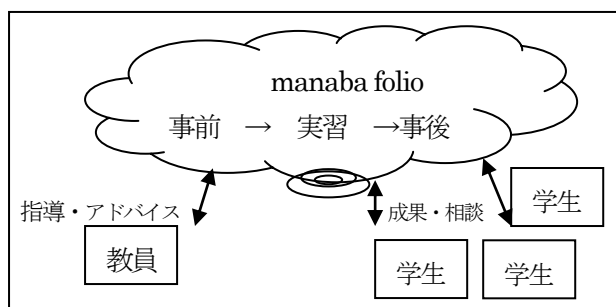
【学校実習の流れ】（個々の学生）



3. クラウド型ポートフォリオシステムの導入

そこで、今年度からクラウド型ポートフォリオ（e ポートフォリオ）を導入し、この実習に対する指導・評価の改善を試みた。一般にポートフォリオには「ラーニングポートフォリオ」と「ティーチングポートフォリオ」がある。今回、採用した manaba folio は両方の機能を持ち、それぞれ使い分けることが可能になっている。

【manaba 活用のイメージ】



4. LMS/CMS との比較

4.1 Waseda-net CourseN@vi の概要

このシステムは、早稲田大学が全学的な情報基盤として位置付けている CMS/LMS である。すべての授業が登録され、またすべての学生が使用できる環境になっている。授業管理（教材提供、小テスト、アンケート、成績処理等）の基本的なことはこのシステムを使っている。また、学生は入学から卒業までの学習成果を蓄積し、アクセス可能なためポートフォリオとしての活用も可能である。しかし、学生からはレスポンスの悪さやインターフェースの使いづらさ、スマートフォンへの対応などいくつか使用にあたっての難点が指摘されている²⁾。教職大学院でのさまざまな科目とりわけ長期実習になる学校臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲでの運用に関しては不都合なことが多い。



Waseda-net CourseN@vi の画面

4.2 manaba folio の概要

manaba folio を最初に使い始めたのは 2008 年の国際交流プログラムにおいて日本の高校生とイギリス、台湾の高校生との交流用であった。今回は担当している科目と学生に対して活用することになった。このインターフェースの基本仕様は「ポートフォリオ」「コース」「コミュニティ」の概念からなる。

「ポートフォリオ」では学習者の学習成果や振り返りなどのデータが蓄積、授業者の授業記録が可能になり、まさに e ポートフォリオが出来上がる。学生同士が閲覧しあうことで学び合いも可能になる。

「コース」では授業者は受け持ちの講座を管理でき、レポート提出、掲示板機能で各種連絡が可能になる。

学習者は設定により、レポートを閲覧し合うことが可能であり掲示板機能で事前や事後の議論が可能になり、相互学習や学生同士の学び合いも促進できる。

「コミュニティ」は授業以外の交流など、インターネット上の SNS のような役目を果たす。



manaba folio の画面

5. システムの評価

5.1 シンプルな概念設計

インターフェースの設計は非常に直感的で操作に迷うことがない。また 3 つの単純な概念から構成され、それぞれの役割が明確である。CourseN@vi に比べると格段に使い勝手がよく、レスポンスが軽快であることは学生にも評判がいい。

5.2 スマートフォンや携帯電話への対応

現時点（2012 年 6 月）では、次の携帯各社の機種に対応している。

- ・ docomo : 903/703 以降
- ・ au : W5x 以降
- ・ SoftBank : 705/81x/91x 以降

6. 可能性と課題

このように e ポートフォリオを活用することで指導と評価を的確に行うこと方向性が見えてきた。また、教員にとってはティーチングポートフォリオとして FD への活用も可能性がある。今後、実践を積み重ね、大学だけでなく高校などの学校現場でのさまざまな評価に関わる活動に対し、manaba をどのように導入・活用していくのかも今後の検討課題としたい。

【参考文献】

- [1] 中央教育審議会「教員の資質能力向上特別部会」の審議のまとめの概要、2012 年 5 月 15 日。
- [2] Waseda-net Course N@vi ファーストステップガイド（教員編）：早稲田大学メディアネットワークセンター、2012 年 3 月 25 日。